

O S Sの生活史

第二篇

一歳の時に、パソコンにお茶をかけて壊したらしいんですよ

語り手＝岡本晃朋

聞き手＝大川貴久

2026-07-17 46分20秒

二

一歳の時に、パソコンにお茶をかけて壊したらしいんですよ

語り手＝岡本晃朋

聞き手＝大川貴久

2026-07-17 46分20秒

——はい、ありがとうございます。じゃあ始めていけたらって思
って。まず簡単に、岡本くんがソフトウェアとか、そういった
ものを触るきっかけとか、そういったものが何だったのかとかっ
て、覚えてたりしますか。その足取りというか。オープンソース
とか、コーディングとか、そもそもそういうところから。

パソコンとか、昔から家にあつたから触ってた、っていうのが
一番正しいですよ。なんだろうな。なんか、まあ、両親から聞
いた話で、僕はね、パソコンにお茶をかけて壊したらしいんす
よ、一歳の時に。

一歳の頃からもう家にあつて、ずっとあつたらしくて。逆に言
うと、壊れたパソコンを自由にいじらせてもらえたんですよ。だ
からそういうので、分解して基盤の知識をつけたりだとか。新し
いパソコンとかも使い、ずっと小学生から使っていて。なんか
は、プログラミングとかにも自然に触れるような環境にいたかな
とは思いますね。回答になってますかね。

——あの、本当に、全然雑談だと思ってもらって。なんで、じゃ
あもう小学校の頃とかから、もう全然プログラミングとかやって
た感じですか。

そうですね。なんか、ずっとやってましたね。最初はいわゆる
ブロックプログラミング、Scratchとか、そういうものもやって

たけど。それよりは普通にArduinoだったりとか、ああいうも
のを使ったハードウェア。今も結構やったりしますけど、ハード
ウェア系をもともとやってましたね。

動くと楽しいですから。

——なるほど。そうですね。もう、ハードウェア系は。

——えっと、で、結構その、全然そういうことを進んでついで
ところ。ハードウェアもやりつつ、ソフトウェアとかもやって
るような。その、例えばGitHubとか、そういうのとかって、何
がきっかけで使い始めたとか、そういうのは。

はいはいはい、ありますね。なんかGitHubを使い始めたの
は、単にプロジェクトマネジメントのツールが欲しいなっていう
のと。中学か何かの時に、自分のプロジェクトを同じ部活の人に
共有しないと、みたいなことがありまして。そういうところで知
ったんですよ、Gitっていう存在を。もともとはオープンソー
スとか、単純に自分の作ったものを公開する場所としてだけ捉え
てましたね。

——でなんか、その、結構コミュニティにたくさん入ってるイメ
ージがめちゃくちゃあって。その、今回の話を聞こうと思って、
RVCとか以外にもいろいろ幅広く入って。そういう情報って、どっ

から持ってきて、なんか入るとか。初めて入った時とか、覚えてないかもしれないんですけど、覚えてたりとか。

結構覚えてます、最初に入った時は。そうですね、入ったのは、私もともと映像制作とか、作曲とかをずっとやっていて、そういうコミュニティに入ったのが最初なんですよね。例えば作曲コミュニティとか入ったら、音源のプラグインとか自作してる人とか、エフェクターとか、やっぱりいるんですよね。ハードウェアもソフトウェアも。そういうところで、エンジニアのコミュニティの方にもどんどん参入していったって感じで。

そういうふうなサーバーって、通話ベースでいろんなことを話しますから。そこで結構インターネットに慣れていたかな、という感じがしますね。インターネットが、高校生になるまでなかった人間なので。そういうところで。

——そういうコミュニティの入り方っていうのは、なかなか経験してなかったんで。そういうところが、なるほど、あるのになってというのが。その、調べた感じだと、高校生の頃からいろいろ結構やられているのかな。高校生の頃からの実績とかがたくさん出ていたりとかっていうところで。高校生の時は何をやっていたのか。特にオープンソースだけじゃないんだけど、自分の活動としてどうやってきていて。

——じゃあ、オープンソースとかだと、今オープンソースっていうところでRVCの話とかをよくしてたりとか。それに関わったきっかけとかって。

覚えてますね。関わり始めたのは、コミュニティの方で流れてきたのが一番最初なんですよね。いわゆるStable Diffusionであったりとか、そういうようなクリエイティブにAIが本当に流れ始めた時で。私は普通に論文とか読んただけだったんですけど、そういう時に、オープンソースとして公開された音声合成ライブラリだって。

めちゃくちゃコードが汚くて、読めなかったんですけど、正直。自分って、こういうふうなところにぜひとも参画して、そのプロジェクトをより保全していきたいな、という気持ちがあったので。ある意味の承認欲求かもしれないですけど。最初はコミットを شدしたのが最初ですね、あのプロジェクトは。

——えっと、もうそれからどれくらいやられています。結構もう。

そうですね。なんか高校生か中学生か忘れちゃったけど、結構やっていますね。で、なんか今日ボスがまた、なんか久しぶりに、あれ、プルリクエストをマージしたので、ちょっと、お、って思ってたんですけど。まあ、一応、二年くらい前に開発を終了してアーカイブしようかな、みたいな話があったんですけど。なんか

勝手に動き出してるので、どうなってるのか、ちょっと私も覚えてませんが。

——そんな感じで。プルリクとかは結構出してる感じなんですか。全然、結構出してたり、っていう。

そうですね、結構プルリクは出してると思いますね。もちろん、普通の開発者とかに比べたら少ないとは思いますが。どこでいくら出したかって、見れないと思いますけど。

——そうですね。

RVCとかだったら、結構コード書いた記憶だけはあるんですけど。コードを書いた、コミット数だったら見えるのかな。コミット数にして一一一コミットか。RVCだけですけどね。RVCだけで書いてますね。

これ、なんかあれ、いわゆるスカッシュマージだけど、覚えてないですけど。そのPR一件につき一個のコミットになっていたと思うので。そんなにPRを出した記憶ないんだけどね。分かりません。

——ここを見て汚いから保全したいっていうのは、なかなかすごい。パッと見た時に、そんな何か思うぐらい汚かったというか、改善できるなって自分で思った、って感じだった。

私だったらできるな、っていうのが。単純に、技術にすごい興味があって。中身、いわゆる論文がなかったんですね、あのプロジェクト。今もないんですけど。

なんか中身どうなってるんだろう。なんか敵対生成、じゃないわ。えっとね、なんだっけな。ベクトル量子化を使ってるんだ、みたいなことがライブ러리から見て分かるんですけど。あと、あれ、VITSっていうふうな、また別の音声合成をベースにしてるとか分かるんですけど。なんかその時代で多分、一番フロンティアなくらい性能が良かったので。これってどうやって、そういうふうな性能を実現しているんだろうか、であったりだとか。そういうところに興味を持ったのが最初ですね。

——すごい。すごいよね。なるほど。今、研究してたりとか、そういうところに直接的に関わってるっていう感じなんですか。

RVCとかで見つけた技術とかですかね。そこら辺、結構関わってると思いますね。

昔からコーディングとか、機械学習とかも。高校に、なんだっけな、なんかゼロから始める機械学習みたいな本があったので、そんなのを読んでたんですけど。それをPyTorchでプラクティカルにやってみようって思って。製品としてやったのは、あれが初めてかもしれないですね。一応それまでも、いくつか機械学習のもので、例えば楽譜を自動で音から生成するものとか作っては

いたんですけど。それ以上に、ちゃんとしたものを作ったな、という印象があります。

——僕、岡本君は生物学を結構メインでやってるイメージだったから、そっちの方までって。

ああ、それはちよつと、悪い友人に歪められただけなので。

——いや、もうちよつとそれも、何かもしよかったら聞かせてもらったりとか。今やってることとか、何か聞かせてもらえたらいいですか。

今やってるっていうのは、その私の研究とか。あとは今、その歪められたって言ってたから、そういうのに興味を持ったきっかけじゃないけど、関わるきっかけ。生命系の話になるけど大丈夫ですか。

——全然大丈夫です。

私の中高が、スーパーサイエンスハイスクールっていうふうに呼ばれる、文科省がお金をくれるところだったんですよね。多分ご存知だと思いますけども。

——そうですね。僕もそい、SSHでした。

そうなんです。まあまあ、それはよくて。だからそういうところで、他にもやつぱり、その研究してるメンバーみたいな人がいて。何か、とある子が、大阪大学のSEEDSって分かりますかね。東大のGSCだっけ。高校生向けの講座みたいな。あんな感じで研究できるやつがあつて。そこで免疫学の研究をしていた友人在るんですよ。

私は元々、情報一本でやってたんですが、その人の研究を見て、これええなつて思つて。気づいたら、そっち側にいたみたいな感じなんですよ。

なんか、あともう一個あるのが、うちの、いわゆる大学附属で、しかも国立みたいところがあつて。なので大学の設備とかいっぱい使えたんですよね。そういうところで、脳波系であつたりだとか、そういうふうなものを貸し出してもらつて使つたりとか。逆に、私が被験者になったりとか。そういう経験もあつて、生体情報であつたりだとか、それ以上に人の仕組みだつたりとかに興味を持ったつていうのもあると思います。

——今どういふのをやってるのかつていうのを、ちゃんと聞いたことがない。高校時代から一貫してそんな感じでやってるんですか。

いや、そんなことはないと思います。本当に。だから最初の方は、その音声合成、合成じゃないわ、その楽譜を自動で作るや

つを作ったりだとか。ニューラルネットワークで初めて遊んだ時ですけど。あとはやったものだったら、シンセサイザーを作ったりとか。

——結構、二〇二一年にハッカソンで多言語翻訳。

なんで知ってるんですかね。ありましたね。

——そういうのをやってるからね。その、音声から移ったっていうのは、それが、今の話がきつかけだと。

そうですね。その方は結構あると思いますね。今のSecHackは音声に戻ってきましたけど。

——音楽もなんか結構、エレクトーンフェスティバルとか、なんかいろいろ出られたりとかね。

ちょっと恥ずかしいんだけど。そうですね、なんか音楽だけは昔からやっていたので。逆に、なんかそれ以外でできることがない気がするの。今もずっとやってますね。なので、楽器の演奏だけは。

——楽器はちなみに何が。

ピアノみたいな感じですけど、その電子楽器バージョンみたいなものをやってますね。他のやつはやめちゃいました。

——実際に、今までオープンソースとかもやってたのと、生物学とかって交わったりとかするんですか。

いや、結構してると思いますね。多分私、その生物学の領域にいる人間としてはコードが書ける方だと思うんですね。多分。もちろん、なんか、いくらでもありますよ、すごい人は。そうなんですけど。オープンソースで培った技術であったりだとか、あとなんか、プロジェクトの保守性の話であったりだとか。

研究者、特に生物系とかって、その場で使える解析コードを書いたら〇〇みたいな感じで。いざ論文を出した数式を見て、それが再現可能かって言われたら、大体できないんですよ。なんでかって言うと、コードが間違ってるから。じゃあ公開してくれ、っていうのが起こる。まあ、それがね、Natureレベルでもやっぱり起きるんですよ、実際に。あれ、今ちょうど一週間前に、再現されても、そんなんでぶち切れてましたけど。

まあ、一回それは置いといて。なんか、そういうふうな時に、じゃあ、なんか逆に、なんか私が関わったものだったら、そういうのを綺麗に保つことができますよ、であったりだとか。オープンソース的な観点だったら、あとは、そうですね。逆になんか、自分がそういうふうなコードを見た時に補修できる、であったり。人のコードをある程度読める能力とかはあると思いますね。

なんか、オープンソースで、まあ、いろんな人のコードを見たんだとか。プルリクエストも、なんかいくつか私がレビューして

マージするみたいな作業も、やっぱりありますから。なんかそういうふうなところで目が鍛えられたのかなとは思いますがね。

——確かに。オープンソースって、意外とそういうところで鍛えられるのかな。

そうですね。そういうふうなことがあるかもしれないですね。

——今、実際にオープンソースになんかコミット、最近出したりとかってしてますか。

そうですね。最近はこちらと忙しくてできてないですけど。なんかいくつかやりたいなと思ってスターを付けてるプロジェクトは、まあ、何百とあるんですね、実は。

——ああ、そう。なんか、さっきGitHubを見たら、めちゃくちゃスターがついてて。

あ、そうか。見えるんか、あのスターは。

——ああ、二二九とかで。

そうですね。まあ、普通になんか研究で使うものもあった。ただ、なんかこれこうやったら改変できるな、であったりだとか。で、なんか一番上、なんかSpeechBrainとかだったら、これもうちょっとだけ性能最適化できるな、みたいなことを思っている。

て。コードを見てたら、まあ、そういうのをやっていこう。まあ、やるために置いてますね。

——そうですね、多分そういう感じの技術的なことを使って、いろんなところで繋がってるっていうところで、割とベースになってるんじゃないかなっていうふうには思います。

そうですね。そこはそう思いますね。

——もうなんか、知識が多くて。全然知らないことを、いや、ありますって言って出してくてるんで、本当にいつも本当に助かってます。

——今、活動していることって言うと、大学での専攻と、あと他に何をやってるっていうのを、メインでやってるっていうのが。

そうですね。あと、なんか大学での研究活動よりも、他の研究機関とかでの方の活動の方が多いですね。そうですね、なんか、人のつながりで、今も国立情報学研究所の方にはお世話になりますし。今、研究研修生として受け入れてもらっていたり。

——それは今、生物学の方の分野でやってるっていう。

まあ、そうですね。生物と情報のちょうど狭間くらいかなみたいなところでやってますね。いわゆる、人間を模倣したような、

バイオインスパイアードとか、ブレイン、ニューロモフィックコンピューティングみたいな言葉がありますけど。人の神経活動だったりとか、そういうふうなものを模倣したようなネットワークだったりと、人の網膜モデルを再現した、とか。いろいろとあるんですけどね。そういうふうなもので性能改善を狙えないかな、みたいなことを考えてますね。

——全然、私が今、入力も。いやいやいや。そんなつもりは一切ないので。初めてで。あとはSecHackをやってるって感じですか。

そうですね。SecHackもやらせていただいていますね。

SecHackはその、音声系で戻ってきました。

なので、技術ベースでやってるんですかね。

やってますね。

——結構、聞いてた感じ、その岡本君が好きでやってるものと、研究で入ってるものが結構交わってるかなっていう感じのイメージを聞いてて。最初の方に話してた話と結構変わってて、直接聞いたことないんで、できれば聞きたいなというところがあるんですけど、お願いしてもいいですか。

その方は、ちょっとあれを未踏と勘違いして、そういうようなことを言っておけばいいかなと思ったので。恥ずかしい勘違いで

すが。実際そんなことはなかったですね。ちょっと方針転換はしましたね。

今やっていることとしては、音声の保護ですね。今、大川くんもこの動画を録音というか、議事録の方として録音されているけど。こういうのって、私、大川くんっていう名前と、大川くんの声と、今僕が「大川くんが静岡大学だよ」っていう言葉を言うだけで、大川くんの所在とかが全部。すごい大切な個人情報になっていくと思うんですね。そういったものを保護する技術みたいなものを考えています。

こういうところで、応用先としても、医療だったりとか、より安全な音声保護であったりとか。他にも、個人情報っていうふうなものの扱い自体を変えるみたいなどころまで、第三としてスコープには入れますけど。

オープンソースのRVCとかに使ってきた音声合成、あとはそういうふうなところでできた東大の方とか、いろんな人とかから得たそういうふうな情報とかも持ちながら、実装してこういうところになっておりますね。

——実際に、ポスターを見て、どういうふうにやるんですかっていうのが結構気になったっていうところがあって。あれ、どういう感じで、POCまではできてるって話だったんですけど。あれはどういう技術とかっていうのを教えてもらったり。

いいですよ。詳細に話すと後から変更になった時に困るので、概要だけに。話すと一時間話せますから。

音声っていうふうなものは、なんかもちろん、特徴っていうのがいろいろと、私たち抽出することができるとすよね。例えばですけど、今私が話している声の音程、F0とかピッチみたいな言葉を使ったりしますけど。であつたりだとか。あと、イントネーションであつたりだとか。あと、私、結構あるのが、その言葉を話す速度。だから、この単語は早いけどこの単語は遅い、みたいな感じで、結構人によって抑揚みたいなものが生まれるんですけど。こういうふうなものは十分に特徴量として扱うことができるはずなんですよね。

そういうふうなものを、まず音声から取り除くというか、抽出しようというところが最初にあるんですよね。長く話しすぎる。簡単に言いますと、音声から特徴を抽出して、特徴のない音声みたいなものを、人がもう一回可聴になるように合成し直す。そしてもう一つが、権限を持った人が、権限によって一部の音声的な特徴を復元した音声も作成することによって。その用途に応じた、その用途に必要な情報だけを持った音声みたいなものを提供することで、プライバシーの保護みたいなものを目指している、という。

——ありがとうございます。権限の管理とか、どうやって考えてるのかなって、結構パツと聞いた時とか。その、どういう段階と

かっていうのが、結構、パツと聞いた時に気になってですね。どういうことを考えているのかなって。

そうですね。逆に私は、その鍵の部分が、全然本質。保守は保守だけど、そこまで大事だなんて思って、あんまり触ってはなかったんですけど。得た特徴量みたいなものを、普通に鍵を使つて、RSAとは違いますが、暗号化してしまつたらいいだけの話で。鍵の保守性みたいなセキュリティの話は、また別途ありますけど。そういうふうなものを適切に管理してあげれば。いわゆるシステムなのか、ファイルエクステンションなのか、まだ分かりませんが、そういったものの実装になるかなと。

ちよつと回答になってるか分かんないですね。フォローアップがあれば知りください。

——そういう感じになるのかなっていうふうに思ってたので。さすが、そういう感じでできるよね、って話をされちゃうね。

——そうですね、いろいろ結構やられてるっていうところで。なんか今まで、そういうオープンソースとかも含め、いろいろ活動とかをやってきて。そういうところでの活動で、課題とか、今まで難しかったこと、そういうところに関わる上で、課題とかって何かあつたりしました。それとも現在進行形で。課題とかあると思うんですけど、今感じてるなっていうのは何かあつたりしますか。

オープンソースだったら、やっぱりそのコミュニティの育成であつたりだとか、開発者のコミュニケーションが、やっぱりすごく難しくなってますよね。

そうですね、今は大丈夫ですけど。昔だったら、コミュニケーションって基本的に英語を使わないといけないけど、中学生とか高校生の時は全然使えなかったよね、っていう。言語の壁があつたりだとか。

コーディングの思想とかも人によってやっぱり異なりますから。このアーキテクチャにこれはダメでしょ、みたいなものを突っ込んでくる人もいれば、動けばよしって言いながらそれをマージする人もいれば。そういうところの、いわゆる理念、コーディングルールみたいなものを、どうしても統一するのが難しいこととかは、今も問題というか。私がまだ上がりたてさんの時かもしれないですが、難しいなというふうに感じてますね。

あとは、オープンソースを使う人たちの倫理というか、そこらへんもしっかりと作っていく必要があるなと思っていて。多くのオープンソースが、いわゆるライブラリだったりとか、結構根本の部分だけど。私が関わるのは結構その実装の部分、というか、実際に作るアプリケーションとかの方のものに関わってますので。GitHubとかの、意味のないPRだったりとか、イシューみたいなのが、やっぱり来るんですよ。

そういうところで、いかに利用者側の。利用者側の、なんて言うんだろう。まあまあまあ、そうですね、本当に言葉が出てこない。何かを高められたりとか。私だったら、わざわざ Discord サーバーみたいなものを用意していて、そこで勝手に解決してもらうようなエコシステムを作る、であつたりだとか。そういったところは今も課題になってくるのかなって思ってます。

——結構、オープンソースだからその GitHub で完結するのかなと思いきや、結構みんな Discord を使ってるイメージがあつて。そうですね、入ってどんどんやってくつていう感じになつて、っていうところで。実際、GitHub 上だけだと完結しないですかね。

できると思うんですけどね、正直なところ。やっぱり分けたいところがありますね。開発者たちのコミュニティとしての GitHub と、ユーザーのコミュニティとしての Discord みたいな感じで分けたりだとか。

そうですね、そういうのがあつた方がいいですし。なんか BVC はちょっと特殊で、ちょっと WeChat の方にコミュニティがあつたりとか。開発仕様のね、中国の研究者が主に集まっているようなところがあつたりだとか。なんかいろいろとありますね、そういうのが。

——えー、なるほど。コミュニティってなかなか難しいです。今、言語の話が出てて、そうかそうかと思って。確かに英語とかって難しいです。そうですね。

最近、本当に中国語メインのプロジェクトも多いですから。読めないなと思いながら、ちょっと勉強しましたけど。RVCのリリースファイルとかみたいな、全部大体中国語で書いてある。今はAIも発達して言語の壁はほとんどないですけど、昔はちょっとそれも辛かったかなとは思いますね。コードの中に書いてあったりとか、最悪ですよ。

——コストが上がっちゃうから。なるほど。それで言うと、やっぱりAIとか、なんかそういうのが結構最近出て。結構あいうのって結構助かる。

そうですね。結構積極的に使おうとは思ってますし、実際使ってますね。オープンソースのプルリクエストにAIをそのまま使っているのはあんまりないですけど。例えば、保守性を保つためにコードのレビューをしたらどうか。ミニマムなチェンジとかで、AIがどういうふうに行動するのか分かる部分であれば、任せてしまっただけ自分レビューする、みたいなことも十分ありますね。

——はいはい。この頃、そのAIを使う人って結構、人まちまちで。オープンソース、そうですね、意見が分かれます。

いやー、そうですね。

——どんどん使って、確かに使っていけたらいいというのは。

そうですね。そこもやっぱり、利用者のマインドってというか、分かりませんが。アビューズではなくて、ちゃんとした活用みたいなところの線引きができる、みたいなところは、やっぱり非常に大事だなというふうには思ってますし。

私もちょっと前にやらかしましたけど。AIだけを使ってやってみると、自分の思想とかから外れた、あとは自分の思考の枠組みから外れてしまうと、制御できなくなってしまうというのがよく分かりますので。

——じゃあ、今の話、聞けたらなっていう。うまくいかなかったりとかの話とか、聞けたらなって。

そうですね。例えばですけど、本当に時間がなかった時に、ひとまずAIに資料の叩きを作ってもらおう、というふうには思っています。そうすると、自分自身が予想できる結果じゃないものが、いっぱい出てきてしまうんですね、生成物の中って。なってしまうのが本当にダメで。

何が必要かって、今になって思うのは、十分なタスクの粒度の分解だったりとか、AIの生成結果っていうのが、自分の認知というか、理解できる範疇にあること。そういうふうな中でAIを活用していくっていうのは、すごく大切なんだな、っていうふうなことを、そうですね、最近はずごく感じてますし。ぜひとも他の人々とも、そういうふうなことを理解してほしいな、っていうふうに思っていますね。

——そうか、AIをいろいろ使っているのはある。確かに僕も、そのAIを使って、資料とか、ある種プロジェクトに対して貢献しようとしてしまおうとすると、なかなか難しいところがあるっていうふうに感じてて。やっぱりそれを、オープンソースとか、実際にそういうとこだと多くの人が関わってくるんで。確かにあるなっていうのを、今聞いてて、すごい感じましたっていう。

そうですね。やっぱり、いるコミュニティっていうところの育っているのが、一番大事ですよ。

——そういうところだと、なんか最近、コミュニティとか、コードとかでは関わってないくても、なんかそのコミュニティとかに関わったりとか、そういうこととかしたりしてます。

結構してますね、やっぱり。それこそ高校の時から関わりがあったり。皆さん研究をやっている方とかで集まったりだとか。神経系の、海外にもいたりだとか。あと、なんかやっているのは、JOAI、日本人工知能オリンピックみたいなところで、その高校生の育成をしてあげたり、その後のその子たちの研究の面倒を見てあげたりとかしてますね。基本、壁打ちの相手だったとか。

——はいはい、してます。なるほど。多分、今まで教えてもらって側から、教える側についているところ。

そうなんですよ。

——コミュニティの関わり方も確かに。オープンソースとかもいろいろあるんで、そういうのができたりするといいいですね。

そうですね。はいはいはい。

——すみません、もうちょっと話せます。あともう少しだけ。岡本君、オープンソースとか結構、いろいろ個人的に、なんかそのコミットはしてないけど、なんか触ったりとか、そういうことを結構してたりとか。

そうですね。結構なんか、自分自身が使うプロジェクトとかはオープンソースのものが多いです。製品じゃなくてオープンソ

ースのものを使ったりだ。神経系とかでも、例えばなんですけど、ネズミに電極を刺させてデータを取るんですけど。そういうふうなものを使える形にノイズを除去したりとか、スパイクソートみたいなものを行うときには、オープンソースのライブラリみたいなものを用いることがほとんどですよ。

ああいうふうなものって、閉じてなくて、公開されてるものが多い。なんか、探すときはまず、そのオープンソースを探してみたいな感じだったりする。なんか、これを使うのが当たり前だよね、みたいなものがあったりするんですけど。そうでなかったとしても、結構オープンソースのものを使うことの方が多いですね。なぜかって言ったら、自分で手を加えられますから。

例えば、エコシステムを作り上げて、一連の作業を自動化しよう、であったりだとか。だからそういうのは、オープンソースで公開してないけど、なんか自分自身でプライベートで持ってるリポジトリみたいなものが、いっぱいあります。

——そういうのがたくさんあるんだろうなっていう感じの。リポジトリが、プライベートをめちゃくちゃコミットしてたりとかするんで。そうですね。というところで、実際なんか最近、そのオープンソースを使って、なんかちゃんと作ったのって、なんかあったりします。その、実際オープンソースとして出してないけどっていうのだと。

そう、出してないけど結構いっぱいありますよ。その作ったものの自体は。何があるか。オープンソースのものを裏で使ってますよ、みたいな。それこそ、なんか今回作ったSecHackのブルーフォブコンセプトも、裏で動いてるのは、その音声合成の、BVCではないですけど、とあるライブラリ、オープンソースのものを使っていたりだとか。そうですね、いや、結構使ってると思うんですけど。どういうのが知りたいですかね。

——本当に最近とかで、全然なんでも。

そうですね、最近だったら、他にも、例えば最近その神経系のオートメーションを組んだものもありますし。あとはこれは、強化学習とかでちょっと実験してみたときの。これ、なんかよく分からないライブラリを入れた記憶があるんだが。忘れちゃった。

結構なんか、オープンソースって、なんかやっぱりコードが見えてる分、正しさが保証されるとまでは言いませんけどね。なんかそういうの、逆に自分で見ることもできますから。一切ブラックボックス化せず、自分のシステムに組み込めるところでは、すごく活用しやすいものだと思いますね。

——使ってて、っていうところで。結構その、神経系でも使うんだっていうところが、正直。

そうですね、結構使いますね。逆になんか、進歴はなんか、逆になんかそういうふうな製品を作っていると、オープンソース思考なのかな、分からないですけど。そういうところがありますけど。一方で、例えば脳波だったりとか、イメージング技術になってくると、あまりオープンソースはないかな、みたいな印象はありますね。

——もう、じゃあ使うものが用意されて、でもそれを使う。

ですね。なんでかっていうと、その、いわゆる機械が必要じゃないですか。クソデカイ、寝っ転がるためのあれが必要ですから。それと一緒に付属してくるんですよ。そうだったら、オープンソースでやるというよりは、なんかその企業の方で用意したソフトウェアを用いてやる。すでにインストールされている状態でいただく、みたいなことの方が多かったですね。

——やっぱり。ありがとうございます。そうですね、最後ってわけでもないかもですけど。結構今後っていうか、今いろいろコミットとかは結構してて、でも最近できてなかったりって思うけど。今後なんかいろいろ SecHack を通じて、多分こういうのを言った、オープンソースで公開してるとかあると思うけど。なんかそのオープンソースとかについて何か思ってた、なんかこうしたいとか、そういう思いが結構あったと思って。なんか今後、

それを通していききたいとかって何かあったりとかしますか。自分の活動として、何かを公開に関わることって。

ぜひとも関わっていききたいですし、できるだけ自分の成果物をオープンにしたいというところはありますので。そういう意味だったら、今までコントリビューターとしての活動が多かったけど、なんか一個、自分のプロジェクトを持ってみたいところは、みたいなところはありますね。

なんか一個作ったやつがあるんですけども、GitHub のスターが一〇〇くらいで止まっちゃって。私も最近ちょっとメンテナンスができてないんですよ、そういうふうなものって。なので今後は、なんか的だけ、その責任感あるとは言いませんが、いいプロジェクトをいい感じに保持するみたいところを目指していきたいし。オープンソース、結局コミュニティの育成がすごく大切だと思っているので。どんなものを公開するかにやっぱりありますけど。

立場にも立っている、その開発者側と、やっぱりその分離した状態で何かしら用意してあげるとか、そういうところの整理だったりとかは頑張っていきたいなと思っておりますね。回答になってますかね。

——いや、全然なってます。ありがとうございます。ちなみに、その一〇〇ぐらいで止まってる自分のっていうのが何なのかなっていうのを、今リポジトリをさーっと見ながら。

やめてほしいな。Stable Diffusion の拡張機能みたいなものですね。なんか画像を、あれ、BLIPとかCLIP って分かりますかね。

——はい、分かります。

あれをなんか、そうですね、組み込んであげて。なんか画像から、そのなんか、テキストプロンプトみたいなものをジェネレーターするみたいなものを作って。よくよく考えると、めちゃくちゃ悪用しやすい、すごいものを作っちゃったんじゃないかな。そういうふうなものが一〇〇スター。この中学か高校生か、高校一、二年で作った記憶があるんだけど、よく覚えてないですね。

——やっぱそういうのって、見られるとやっぱ嬉しいというか。使ってくれたりとか、PRとか来たりするんですか。

そうですね。PR 一件来てますね。なんか回した記憶はあります。

——スターちようど一〇〇だ。ちようど一〇〇、キリキリだ。やっぱそういうのって、やっぱスターがついたりとか、やっぱそう

いうね、メンテちゃんとしなきゃなっていう感じになったりとか、持ち弁になったりとか。それとも淡々と。

嬉しいとやっぱ嬉しいですけどね。なんか自分の作ったものが、確かに有意義なもので、その価値が認められるとは言いませんが。そういうふうなところで嬉しいところはありますけど。別に、スターが多いから少ないからみたいなどころよりかは、私はキュリオシティドリブンな、好奇心の方で動いてる人間なので。

まあ、あつたら嬉しいけど、まあ、それに関わらず普通に続けていくだろうなと思います。逆に、スターが多いから継続的にメンテナスしますかって言われると、それを保証できない。今の自分では保証ができないので。自分がエンジニアになるなら絶対ありますけどね。そうではない気がするのです。

そういうところでも、コミュニティの育成としては、共同でメンテナスできるメンテナーみたいな人を探して、プロジェクトに組み込んでいくみたいなどは、必要になってくるんだなと思ってますね。

——確かに。そうですね。めちゃくちゃ、なんか今リポジトリ見て、めちゃくちゃ動いて活発じゃん。全然活発。

ありがとうございます。

——いやいや、そんな。いやでも、その岡本くんはすごい、その結構いろんな技術に対して方向が向いてて、結構手で触って動かすってことをやってるイメージだったので。

そうですね。逆に、手を動かさないと何も理解できないので。

——本当そう。なるほど。ごめんなさい、急にきて、タイトルもちゃんと分らないままやってもらって。

いやいやいや。大川くんですから、別に話しても違和感なかったですよ。

語注

RVC Retrieval-based Voice Conversion。話し手の声を別の声に変換する、オープンソースの音声変換ソフト。

Stable Diffusion 文章から画像を生成するAIモデル。公開されたことで派生ソフトが多数生まれた。

WITS、ベクトル量子化 いずれも音声合成に用いられる技術。WITSは音声合成のモデル、ベクトル量子化は情報を離散的な符号に置き換える手法。

PyTorch 機械学習のモデルを記述・学習させるためのライブラリ。

スーパーサイエンスハイスクール 文部科学省が理数教育の重点校として指定する制度。SSHと略される。

SEEDS、GSC いずれも高校生向けに大学が開く、研究に触れる講座。SEEDSは大阪大学の「SEEDSプログラム」、GSCは東京大学の「グローバルサイエンスキャンパス」。

スパイクソート 脳に刺した電極で記録した信号から、どの神経細胞の発火かを仕分ける処理。

ニューロモフィックコンピューティング 脳の神経回路の仕組みを模した計算方式。

F0 音声の基本周波数。声の高さにあたる。

SpeechBrain 音声処理向けのオープンソースの機械学習ツール群。

スカッシュマージ 複数の変更を一つにまとめて本家へ取り込む方式。

JOAI 日本人工知能オリンピック。二〇二四年に始まった国際人工知能オリンピック (IOAI) の、日本代表を選ぶ中高生向けの大大会。

BLIP、CLIP いずれも画像と言語を結びつけるAIモデル。画像から説明文を作るなどに使う。

国立情報学研究所 情報学の研究を行う大学共同利用機関。NIIと略される。

奥付

本書は、情報通信研究機構（NICT）が主催する SecHack365 の、二〇二六年度融合駆動コースにおける活動として編んだものである。

本書に収める各篇は、クリエイティブ・コモンズ表示・改変禁止四・〇国際（CC BY-ND 4.0）のもとで公開する。出典を示せば誰でも自由に使えるが、書き換えたものを配ることはできない。

これに加えて、各篇の語り手および編者は、原文の趣旨を損なわない範囲で本文を翻訳し、その翻訳版を公開・配布することを許諾する。その際は、翻訳であることと翻訳者名を示すこと。

第一篇

2026年7月15日 オンライン 57分39秒

第二篇

2026年7月17日 オンライン 46分20秒

第三篇

2026年7月23日 オンライン 51分47秒（冒頭欠）

第四篇

2026年7月18日 オンライン 56分24秒

第五篇

2026年8月1日 対面 40分47秒

第六篇

2026年8月24日 オンライン 63分

第七篇

2026年8月26日 オンライン 43分32秒

第八篇

2026年8月27日 オンライン 61分33秒

第九篇

2026年9月2日 オンライン 50分16秒

第十篇

2026年9月5日 オンライン 76分07秒

第十一篇

2026年9月9日 オンライン 49分03秒

第十二篇

2026年9月9日 オンライン 45分26秒

第十三篇

2026年9月10日 オンライン 54分37秒

第十四篇

2026年9月20日 オンライン 55分03秒

第十五篇

2026年9月23日 オンライン 72分22秒

第十六篇

2026年9月27日 オンライン 53分21秒

第十七篇

2026年9月30日 オンライン 88分47秒

聞き手・編

大川貴久

書名

OSSの生活史 第一集

編・発行

大川貴久

連絡先

okawa.takahisa.25@shizuoka.ac.jp

発行日

2026年9月10日